

# 大人数の講義科目で議論の仕方を教える授業の工夫

田中浩朗

東京電機大学工学部

## はじめに

大人数の講義科目においては、講義で学んだ知識を単に記憶するだけの「受動的な学び」から、学んだ知識の活用も含む「能動的な学び」へと受講者の学びのあり方を変えることが、いまだに重要な課題の一つであり続けている。私はこれまで、講義の後に、その講義に関するテーマで受講者に議論をさせることにより、大人数講義における能動的な学びが実現できるのではないかと考えて、様々な方法を試してきた。その際、多くの学生は議論の仕方を身につけていないため、議論の仕方も教える必要があった。昨年度（2019年度）は毎回の講義の後にグループ討論の時間を設け、繰り返し議論を行わせることにより議論の仕方を教えようとした。しかし、大人数のクラスでは、各グループの議論の中身にまで教員が立ち入って指導することはできず、議論の深まりに物足りなさを感じるが多かった。今年度（2020年度）は、コロナ禍の下、対面でのグループ討論が不可能となり、その代わりとしてブログでの意見交換を行ったのだが、これが意外に議論の仕方を教える上で有効な方法であることを発見した。

## 議論の仕方を教える工夫

今年度取り入れた議論の仕方を教える工夫の主なものは以下の通りである。

- ①「議論」とは、人によって意見が異なるポイント（論点）について、理由や根拠とともに意見を出し合い、協力しながら互いの意見を吟味して、各自がより妥当性の高い意見を見出すための共同作業である、ということを理解させる。
- ②議論をする際の意見の言い方のパターン（言い回し）を具体的に教える。その基本は、まず他人の意見を要約し、それに対する自分の意見を、その意見への応答（同意・一部同意・不同意のいずれか）として示すものである。このパターンを、Graff and Birkenstein (2018)に倣って、They Say / I Say と呼ぶ。
- ③議論の内容も、大枠は教員が具体的に設定する。すなわち、講義内容に関連するテーマで学生が議論をしている場面を想定し、議論の「出発点とな

る意見」を教員が用意して提示する。

- ④「出発点となる意見」に対する意見（応答）の例を教員がいくつか用意して、必要に応じて学生に参照させる。その際、教員は「出発点となる意見」に同意する意見と同意しない意見を同数示して、ありうる意見の多様性を示す。
- ⑤受講者に、「出発点となる意見」に対する自分の意見（応答）を、理由とともにまとめて、クラス毎に設けられた限定公開のブログに投稿させる。その際、まずは教員が用意した意見の例を見ないで自分の頭で考えてみることを勧める。
- ⑥ブログに投稿された意見は、締切までは表示せず、締切を過ぎてから一斉に表示する。
- ⑦議論の場における匿名性とアイデンティティを確保するため、受講者の投稿には、各自が定めたニックネームが表示されるようにする。
- ⑧意見の投稿の際、「同意する」「一部同意する」「同意しない」といったカテゴリーを選ばせ、意見の応答別にブログ上で一覧できるようにする。
- ⑨教員はライブのオンライン授業で、意見分布グラフを示し、それぞれの意見の例を紹介しながらフィードバックを行う。
- ⑩ブログに投稿された受講者の意見について、相互にコメントを付けさせる。コメントもなるべくThey Say / I Sayのパターンで書くようにさせる。コメントが付けられた人には、自動的にメールで通知が届くようにする。
- ⑪ブログでコメントを付け合う際には、「敬意と寛容 (Respect and Tolerance)」の気持ちを忘れないように、と繰り返し強調する。

## 結論

今年度の受講者（1～4年生）のほとんどは、率直に自らの意見を述べ合い、しかも理性的で礼儀正しい議論を行っていた。これにより、議論の仕方は、大学初年次から比較的容易に教えることができるスキルである、ということが判明した。

## 参考文献

Graff, Gerald, and Cathy Birkenstein (2018) “They Say / I Say”: *The Moves That Matter in Academic Writing*. 4th ed. New York: W. W. Norton & Co.